いて、首だけ延ばしてあちらこちらを見廻してゐましたが、やがて眞鍮の楯の中に這ひ込まうとしました。ところがちやうどそこに、ハアキユレスが寢てゐたのです。

ハアキユレスよりさきにイフイクレスが眼をさましました。そしてわつといつて泣き出しました。お父さんの王様はびつくりして寢臺から飛び起きると、手早く劍を拔いて蛇を切り殺さうとしました。

しかし王様が斬りつけるよりもさきに、赤ん坊のハアキユレスがむつくり起き上りました。そして、おそろしい蛇が楯のはしに二つ首をつき出してうよ〳〵してゐるのを見ると、泣きもしないでぢつと見てゐましたが、いきなり手を延ばして、ぎゆつと蛇の首つたまを一匹づゝ兩手につかみました。蛇は、あんまり強く喉をしめられたので、二匹とも咬むことも出來ず、若しまぎれに死にものぐるひ

になつてのたうちまわりました。が、しばらくするとギラ〳〵してゐた眼をつむり、苦しさうにもだへましたが、しまひには、ぐつたりとして死んでしまひました。

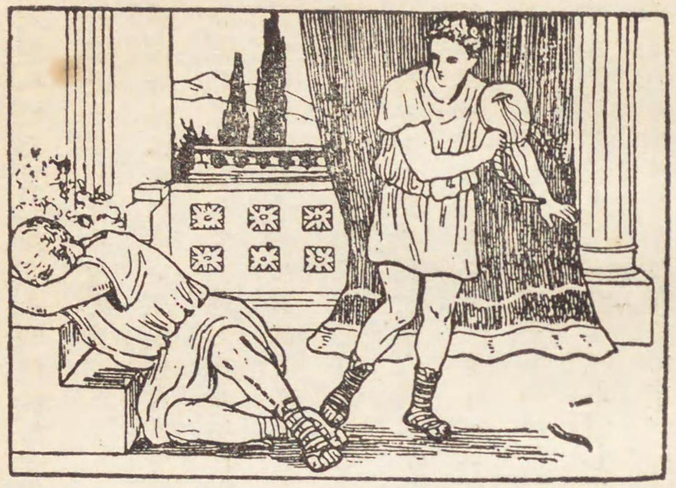
王様はこれを見ると早速蛇を庭にもつて行つて捨てました。王様は、ハアキユレスの勇氣と力の強いのにすつかり驚いてしまひました。そして、ハアキユレスが大きくなつたら、きつと世界中で一番強い人間になるだらうと思ひました。實際、ハアキユレスは後には、さうなつたのでした。

ハアキユレスは大きくなるにつれていつもお腹が空き通しでした。食べるのが間に會はない程早く大きくなつたからです。大きくなると、お父さんはハアキユレスにいろ〳〵なことを勉強させました。讀書、習字、馬乘り、弓矢、投げ槍、相撲、拳闘、又琵琶を彈くことや、歌を唱ふことまで教へました。ハアキユレス

はやさしい立派な若者になりました。が、たつた一つ惡いことは、怒るとかつと夢中になつてしまふのです。

子供の時から、お父さんもこの惡いくせを直さうとせず、自分も氣をつけて直さうとしなかつたので、大きくなればなるほどこの惡いくせはひどくなつて行きました。一度かつとして夢中になると、いつでもそこらにあるものを皆ぶち碎いてしまふのです。あとになつてから氣がついて心をいためるのですが、もうその時にはやつてしまつたことの取りかへしはつきません。いつのことであつたか、琵琶を習つてゐる時、ハアキュレスが本氣にならないといふので先生がハアキュレスを打つたことがあります。

するとハアキュレスはひどく怒つて、そこにあつた琵琶を取ると、いやといふ程先生の頭をなぐりつけました。そのために先生は、まるで鐵砲で打たれたやうにころりと死んでしまひました。ハアキュレスはこれを見ると一度に恥しさと悲しさがこみ上げて來ました。が、いくら泣いても後悔しても、もう先生は生きかへりはしませんでした。



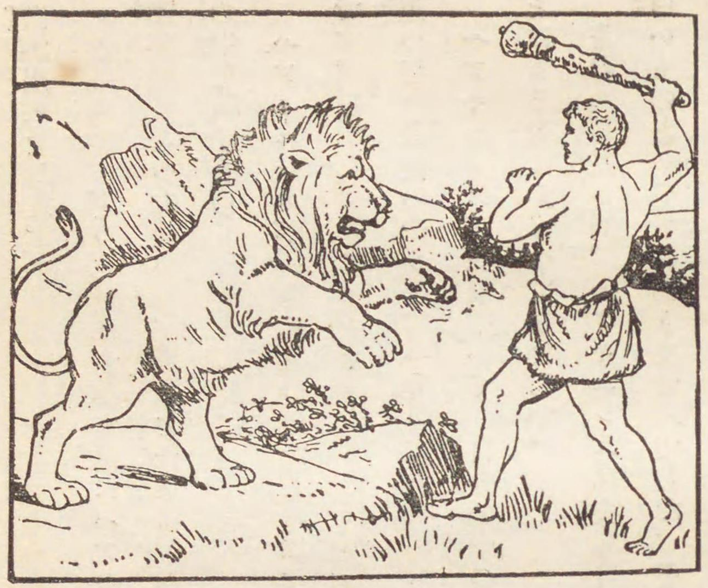
ハアキュレスの生立

このことがあつてから王様は、ハアキュレスを學校に通はせることにしました。學校といふのは、シロンといふ年を寄つた人馬がやつてゐて、王様達の子供五六人に、星のことや、植物のことや、動物のことや、その他物識りの學者が知つてゐることをみ

んな教へてゐました。その外にも、傷や病氣を治す藥のつくり方や、音樂など澤山のことを教へてゐました。

人馬といふのはずいぶん妙な人で腰のところまでは人間と同じで、そこからあとは馬になつてゐて、蹄のある足が四本に、尻尾もあるのです。ですから、生徒を自分の背中に乘せて遊ばせることも出來ます。生徒が言ふ通りにしないときは手に持つてゐる武器でたしなめることも出來るのです。

ハアキユレスが學校を出た時は、とても〳〵強い人間になつてゐました。そこで王樣はハアキユレスを、テーベスの國の近くにある山の國にいつて、牛の番をさせることにしました。そのわけは、その國に一匹の大きな恐ろしい獅子がゐて、國中をあばれ荒して、牛を咬み殺しては食ふので、人々はすつかり恐れて何にもすることが出來なかつたのです。



ハアキユレスの生立

ハアキユレスは山に這入つて行くと、すぐ獅子を見つけて、その頭をなぐりつけ、殺してしまひました。その國の人々は大層喜んで、ハアキユレスを大變もてなしました。そして、テーベスの國の王樣は、ハアキユレスに、よかつたら、王樣のお姫樣と結婚してくれと言ひました。

そこでハアキユレスは、お姫樣と結婚しました。そして、しばらく家を持つて暮してゐる内に、三人の子

供が出來ました。

ところが、どうしたはずみか急にハアキユレスが氣狂ひのやうになりました。頭が變になつたせいか、野獸を征伐に行かねばならぬと言つて、弓矢を持つて町の中を馳け出して行きました。

ハアキユレスが一番に見つけたものは、迎へに來てゐた自分の妻と小供達だのです。しかし、ハアキユレスにはそれがちつとも解らず、野獸が出て來たのだと思つて、氣狂のやうに、一聲叫ぶと次から次へと矢で射殺してしまひました。

ハアキユレスが正氣づいて、自分のやつたことに氣がついた時には、妻と子供とはもう死にかゝつてゐました。

それから長い間、ハアキユレスは夜も晝も悲しんでばかりゐました。何事も面白いものといつてはありませんでした。そこで、たつた一人森の中に這入つて暮

ハアキユレスの生立

しました。そして、たう〳〵しまひには、デルフオイの神の御告げ場に行つて、巫子にこれからどうしたらいゝか尋ねることにしました。デルフオイの神の御告げ場は、パルナサス山の傍で、人も住まぬ淋しい山の神殿にありました。コソント灣の北側を見下ろしてそびえ立つてゐる山で、二つの峯は雲にとゞき、雪に包まれてゐました。神殿は岩のさけ目に建つてゐて、そこからはいつも、

もや〳〵と霧が湧き上つてをりました。この霧は目に見えない不思議な力をもつてゐて、いちどそれを咽喉へ吸つたら、どんな智慧でも出る、といはれてをりました。

人々は、それをアポロの神の思召しだといつてをりました。

ハアキユレスは、デルフォイに着くと、さつそく神殿をまもつてゐる巫子に會つて、これまで自分のしてきたことを話しました。

ハアキユレスの生立

そして苦しげに言ひました。

『私はどうしたらよいのでせう、これまでにしてきた惡いことが目の前に浮んで、毎日私を苦しめます。苦しくて苦しくて……。』

巫子は、ぢつとハアキユレスの顔を見つめてをりましたが、青白い顔を、輝かせて言ひました。

『罪は償はれます、しかしそれにはギリシャにゐては駄目です、旅をなさい、そして苦しいことで自分の身

體の汚れを洗ひ落さなければならないのです。いらつしやい、コリントの地峡を拔けて南へいらつしやい。するとアルゴスの近くの古城に着くでせう。タイリンズといふ城がそれです。そこにはユリシス王がゐる筈です。王はきつとあなたを救つてくれるでせう。その代り、どんな辛いことを命つけるかしれません。しかしあなたはそれを我慢しなければならないのです。その辛いことをしてしまへば、あなたの罪は消えるのです。あなたには辛棒ができますか。』

巫子はさう言つて、ハアキユレスを覗き込むやうにしました。

『できます、どんなことでも。』

と、ハアキユレスは答へました。

『心の中でこんな苦しい思ひをするほどなら、どんなことでもできます。私はすぐにそこへまゐりませう。』

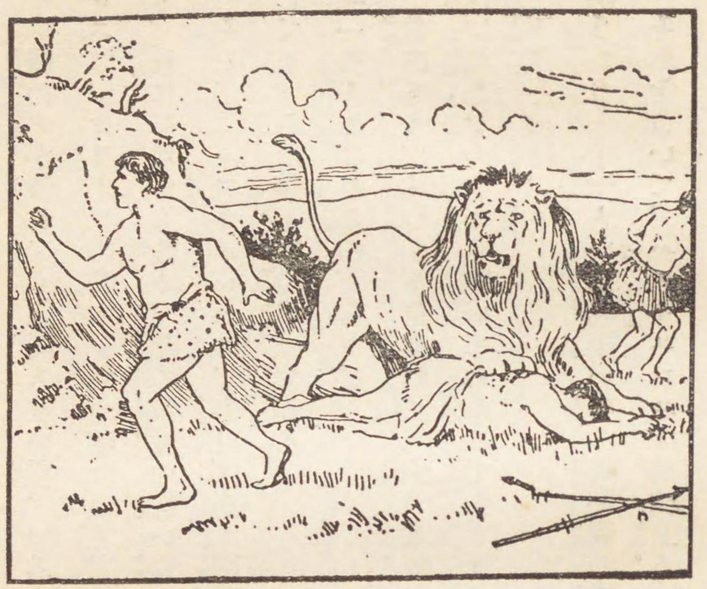
ハアキユレスは、巫子と別れると、その足で、コリントの地峡に向つて急いだのでありました。

二、最初の苦行

ネメアンの獅子

ハアキユレスは、十二年間、ユリシスの王様に仕へて、その間に十二のむづかしい仕事をやりとげる事になりました。これがその後世の人に「ハアキユレスの苦行」と呼ばれるものです。

ユリシスが言ひつけた第一の仕事は、ネメアン獅子といふ非常に恐ろしい獅子を退治することでした。この獅子は、地峡とアルゴスの間にあるネメアンの森に住んでゐました。非常に厚い、硬い皮をしてゐて、まるで鎧兜でも着てゐるやう



でした。獵師たちが何度投げ槍を投げつけても、槍ははね反へされてしまつて、獅子には少しの傷さへもつける事が出來ないといふのです。その内に獅子は獵師を追つかけて來て引き裂いて食べてしまふのです。

ハアキユレスは、直ぐ弓矢を執つて、ネメアンの森に參りました。森の附近は、この獅子の爲めにすつかり荒されてゐますので、もう一人も住んでゐる人がありません。森の中

には陽の光が洩れてくる間もない程、いろ〳〵な樹が茂つて居ります。ハアキユレスは、オリーヴの若木を見つけたので、これを根こぎにして大きな棍棒をつくり、杖にしながら段々、此の氣味の悪い森の奥へ入つて參りました。

そして、ハアキユレスは、半日ばかり薄暗い森の中を歩き廻りましたが、どうしても、その獅子に出遇ひません。

『一體どこにゐるのだらう。』

彼はもう、すつかり草疲れて、大きな椋の木の根元に腰を下しました。そして深い溜息をつき乍ら呟いてゐたのであります。

丁度その時。

『うおう——』といふ物凄い叫び聲が森の奥から起つて來ました。

それをきいて、ハアキユレスは飛び上るばかりによろこび、木蔭にかくれて、その様子をうかゞつて居りました。

すると、鬣から頸のあたりまで、血だらけになつた大きな獅子が火のやうな眼を光らせながら飛んで來るのです。

ハアキユレスは、獅子の横腹をねらつて、大急ぎで弓を射つたのでありました。しかし、矢はまるで岩にでも當つたやうに、はね返されて終ひました。續けて第二の矢を放つたが、これも同じことです。何にもなりません。そこで今度は棍棒を振つて力いつぱい撲りつけたので、さすがの獅子も強力のハアキユレスにかゝつてはかなひません。そのまゝ、打倒されて終つたのです。獅子はしかし、すぐ起き上らうといたしました。その時ハアキユレスはいきなり後から飛びついて、頸をしめて終つたので、長い間大勢の人を惱ましてゐた怪獸も、たうとう息が絶えて終ひました。

ハアキユレスはそれを見ると、滿身の力をこめて、戰つたことですから、氣がゆるんできました。然し、彼はこの獅子の毛皮を剝いで歸へることを命じられてゐるのですから、勇氣を鼓して、その毛皮を剝ぎにかゝりました。毛皮はまるで、鐵ででも出來てゐるやうに、どうしても刄物がとほりません。彼はすつかり途方にくれてをりましたが、そのうちにふと、

『この獅子の爪で切つて見やう、こんな強い獸の爪だから、きつとよく切れるに違ひない。』と思ひつきました。

この獅子の爪は實際、どんな獸でも、すぐに引裂くことの出來る鋭いものでした。この爪だけは石のやうな獅子の毛皮にも、ぶつつりと通ります。ハアキユレスは大層よろこんでその毛皮を剝ぎ上げてしまひました。

それから、彼は、獅子の首を切つて、なかをすつかりくり拔いて終ひました。

何しろ、こんなに巌丈な毛皮ですから、これを身體につけてゐたら、きつと敵を防ぐに便利だらうと思ひつきましたので、ハアキユレスは、獅子の首を兜に、毛皮を鎧にすることにいたしました。

ハアキユレスは、獅子の毛皮の鎧に、獅子の頭の兜をかぶり、意氣楊々とタイリンズの市へと歸つて參りました。

ヒドラ征伐

ユリシスは、まさか、ハアキユレスがネメアン獅子と勝負して生きてかへつて來やうとは思ひませんでした。だから、ハアキユレスが歸つて來たといふことを聞くと、このおそろしい意地惡の王樣もすつかり脅え上つてしまひました。そこでわざ〳〵窓一つしかない眞鍮の大きな桶のやうな穴倉を拵らへさせました。そして、ハアキユレスが、タイリンズの門の所まで歸つて來ると、早速その中に追ひ込んでしまひました。そしてその窓からハアキユレスに聲をかけて、ノープリア灣の奥のラアナ沼にゐるヒドラを殺しに行けと言ひつけました。そこでハアキユレスは、友達のイオラウスに一緒に行つてくれとたのんで、二人で出掛けました。

ヒドラといふのは海蛇の化物で、頭が九つあり、長さは軍艦ぐらいも

最初の苦行

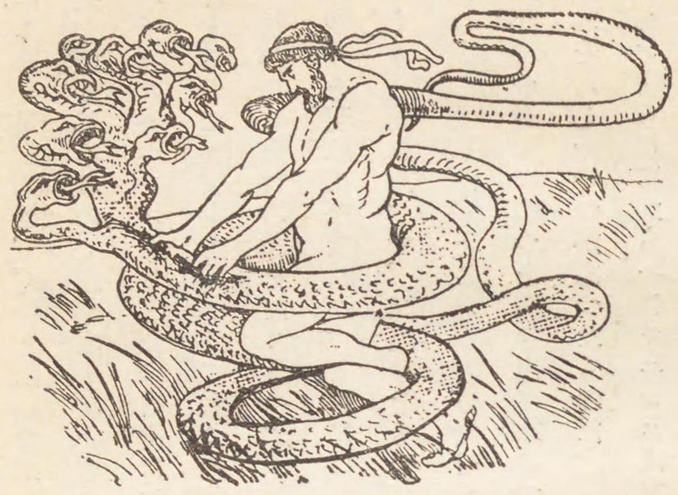
あるのです。ハアキユレスが着いた時、ヒドラは沼の中をうね〳〵とはつてゐましたが、ハアキユレスの來たのが解ると、大きな洞穴の中にかくれてしまひました。そこで、ハアキユレスは矢を一本出して、それに松脂と流黄とをぬりつけて洞穴の中に打ちこみました。ヒドラはすつかり怒つて、卷いてゐた體をにゆーつと延ばしながらおそろしい勢で飛び出してハアキユレスに嚙みつかうとしました

『さあ、來い。』

ハアキユレスは、このいやな氣味のわるい蛇と取つ組み合ひをはじめました。

『うーむ。』

兩手で蛇の首をぎゆつとにぎつて、しめ殺ろしてやらうとしました。九つの頭はうよ〳〵と波のやうに動きました。そしてどの頭もどの頭も一度にハアキユレスにかみつかふとしました。大きな長い尻尾では。ぐる〳〵とハアキユレスの體をまきつけました。ハアキユレスは一生懸命でおさへつけてゐなければなりませんでした。蛇は死にものぐるひになつて尻尾をふりました。



ところが、そこへ大きな蟹がが さ〳〵とやつて來ました。蟹はヒドラの友達で、ヒドラを助けるために出てきたのです、蟹はいきなりハアキユレスの足を鋭い鋏ではさみ切らうとしました。

『邪魔するなッ。』

ハアキユレスは、蟹を蹴とばして甲の上

にうまく足をのせ、ぐいとふみつぶしてしまひました。ヒドラもハアキユレスが喉を強くしめるので息が出來ないものだから、力も段々ゆるみはじめました。それでハアキユレスも片手だけ自由になりました。で、蛇を地面にたゝきつけ、棍棒をもつておどりかゝつて、九つの頭をたゝきつぶしました。

しかし、九つの頭をたゝきつぶすと、すぐそばから新らしく十八の頭がにゆうにゆうと現れて來ました。これにはさすがのハアキユレスも、物も言へない程びつくりしました。で、又棍棒をもつてなぐりつけて、新らしい頭を五つ六つたゝきつぶしました。ところがどうでせう、一つ頭をつぶす毎にすぐそこに新らしい頭が二つづゝにゆつと突き出て來るではありませんか。

『おそろしいやつがあつたものだ。』

息を切らしながらハアキユレスは友達のイオラウスに言ひました。

最初の苦行

『こんなやつを一つづゝ切りはなしたのでははてしがない。どうでもこいつは、すつかり根も葉もたやしてしまなくちやいけない。火をもやしてくれ。燒いちまへるかどうかやつて見よう。』

そこでイオラウスは草に火をつけました。

ハアキユレスは、まだヒドラの喉をおさへつけてゐましたが、火が燃え上つて暑くなると、それを引きづ

ッて來て、火の一番あつい處に投げこみました。火はおそろしい勢でぱち〳〵音を立てゝおどるやうに燃えました。ヒドラは苦しさうにのたうちまわつてうめき聲を上げました。併しとう〳〵燒けてしまひました。煙の中に恐ろしい死體が横たはりました。

ハアキユレスは顏の汗をふいて氣をしづめました。そして言ひました。

『あゝ、こんないやな氣味のわるいものつてありやしないね。さあ、これでタイリンズへ歸るんだよ。』

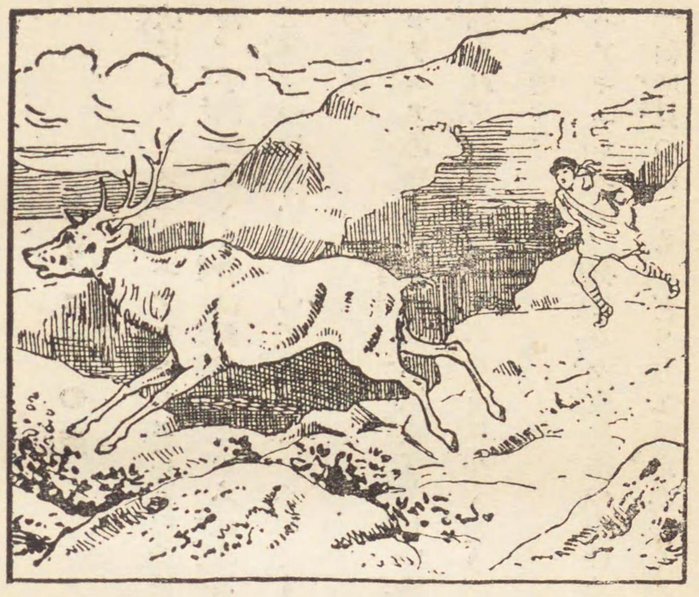
ハアキユレスはヒドラの體を切りひらきました。そして、持つてゐた矢をちよいちよいとつゝこんでは毒血に浸して大切に矢筒にしまひました。これが大へん役立つことになるのです。がそれは後の話です。二人はユリシスの王樣の城にかへつて行きました。

セリニアの鹿

次にユリシス王がハアキユレスに言ひつけた仕事は、やはり大變いやなものでした。手間はかゝり骨は折れるといふ仕事なのです。セリニアの鹿を生けどりにして傷をつけないでもつて歸るといふのですから、とても〳〵大そうな辛棒がいるのです。

セリニアの鹿といふのは不思議な美しい獸で、ずつと以前からこの國の人々には知られてゐました。風のやうに早く走り、角は金で、足は眞鍮で出來てゐるといふのです。

ハアキユレスは、毎日々々鹿を追つかけまはしました。しかしあまり速く走るので何度見つけても、どうしても追ひつくことが出來ないのです。幽靈のやうに



するりと逃げてしまふのです。何箇月も何箇月もかうして追つかけては逃げられ、逃げられては追ひかけしてをりました。で、しまひにハアキユレスは、這入るとちつとも傷がつかないでつかまへられるやうな罠をこしらへました。そして山のさかから鹿を追ひ出して罠の方へ追つて行くと、うまく罠の中へ跳び込んでやつとつかまへる事が出來ました。ハアキユレスは、こおどりをしてよろ

こびました。

『とう〳〵つかまへたぞ！

ハアキユレスは傷のつかないやうな軟い繩で大事に足をしばり上げました。そして背中に背負つて、はるばるとユリシス王の處へ持つてかへつてまゐりました。

猪退治

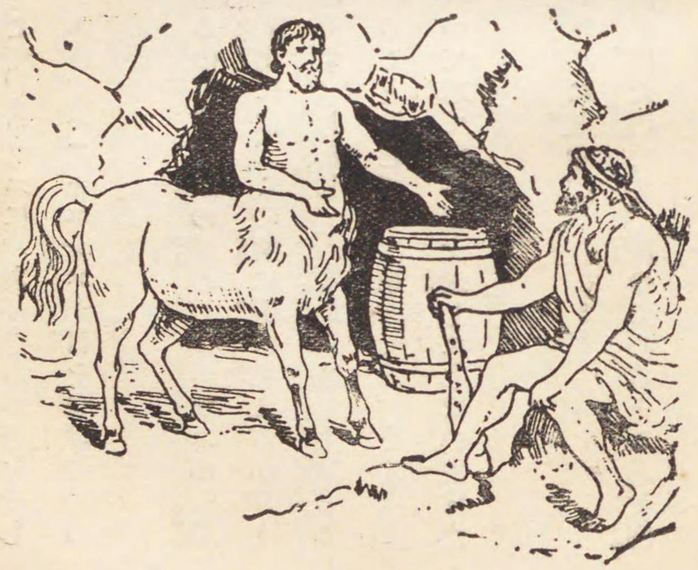
有名な鹿が自分のものになつたので、ユリシス王はすつかりよろこびました。そして今度は、やはり同じ樣な仕事で、もつと骨の折れる用事を言ひつけました。それは一匹の荒い猪を生けどりにして來ることなのです。中央ギリシヤの岩のごつごつしたはだか山の上にエリマンサスといふ町がありますが、この猪はその邊の野や畑を荒しまわるやつなのです。この山に住んでゐる羊番の人は、着物は山

羊の毛でつくつた毛布にくるまつてゐるだけで、寢るのも野宿です。この羊番達が、何度もこの恐ろしい猪を殺さうとしたのですが、いつもあべこべに猪にやられてしまふのです。猪は、おそろしい勢で皆をぶすぶすと牙でつきさしてしまふのでした。

ハアキユレスは、タイリンズを立つてから、アルカヂヤの道もない山の中を、エリマンサスの方へやつて行きました。するとふと人馬の住んでゐる洞穴のところへ來ました。ハアキユレスは以前、年の寄つた人

馬から色々教つた事があるので、ちつともおどろきませんでした。で洞穴の中に這入つて行つて、一晩とめてくれとたのみました、ところが、人馬はほとんど皆外に出てゐて、たつた一人、ホラスといふ人馬がゐるだけでしたが、ていねいにハアキユレスを案内してくれました。

夜ふけに、ハアキユレスは、お腹がすいた上、喉がかわいてまゐりました、そこらを見まはすと洞穴の奥



の方にある一つの樽が目につきました。そこで、ホラスに、あの樽のお酒を少し出してくれませんかとたのみました。ホラスは、ハアキユレスが目をつけてゐる方を見ながら答へました。

『えゝ、實際あそこにお酒があることはあるのです。酒の神のヂオニサスから私達にいたゞいたものなのです。そして私達人馬には、この酒は眼に見えるかぎり遠くの方まで、まるで薔薇のやうに匂ふのです。しかし、あなたにさし上げることは出來ません。私はこの樽に呑口をあけることはとても出來ません。そんなことをしやうものなら外の人馬たちが、かへつて來てから私を殺してしまひますから。』

『すこしくらゐいゝでせう。呉れないなら勝手に飲む。』

ハアキユレスは言ひました。いつもの癖が出たのです。困つてゐるところを内へ入れてくれた親切なホラスが、どんな目にあふか、などゝいふことは考へても見ませんでした。今までだつて、やつてしまつてはあとになつて後悔したことは何度あつたかわかりません。それなのに今度もまた、思ひ立つたことをどうでもかうでもやらうといふ悪い心を起したのです。

『どうかそれだけはよして下さい。』

ホラスが一生懸命でたのむのにハアキユレスは耳もかたむけません。樽の蓋を石で割つて、咽喉を鳴らしてごく〳〵と一のみ飲みました。

しばらくすると、遠くの方から何だか馬でも走るやうな物音がきこえて來ました。にはかに谷の中には、もう〳〵と濃い砂煙があがりました。そしてそのやかましい足音はだん〳〵こちらへ近づいて來るやうです。

氣がついてみると、おほぜいの人馬が、洞穴を目がけて突進して來たのです。

丁寧にもてなしてやつたのに、皆のものを盗んだ慾ばり泥棒の恩知らずの大男が立つてゐて、そばに樽が空になつてころがつてゐるのを見ると人馬どもはそれこそ夢中になつて怒つてしまひました。人馬どもは洞穴の外を狂ひまわつて、石をひろつて來るやら、その邊中の樅の木を根こすぎに引きぬいて來るやらしてこの盗人をやつつけやうとして、おどりかゝりました。

ハアキユレスは弓矢を持つて洞穴の入口に皆を待ちかまへてつゝ立ちました。そしてヒドラの血に浸けた毒矢を次から次へと打はなちました。矢がなくなると今度は火がついて燃えてゐる木の枝を、敵をめがけて投げつけました。そこで人馬は大方死んでしまひ、殘つたものも逃げてしまひました。

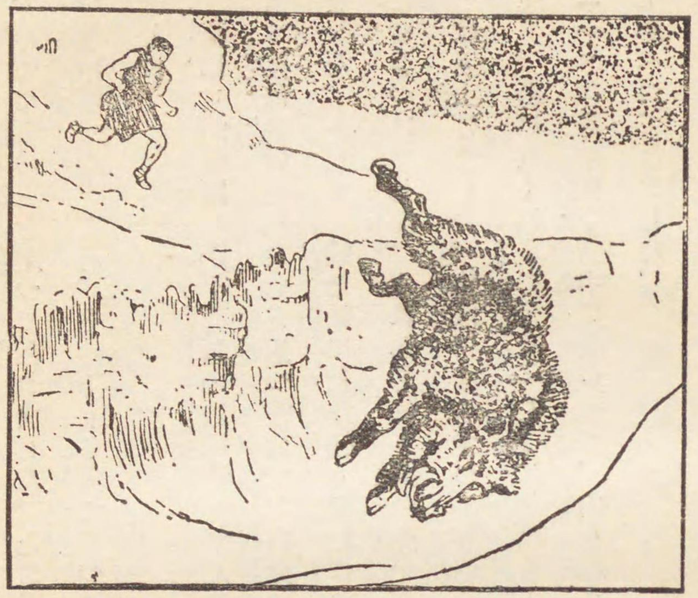
一方、ホラスはたつた一人洞穴に殘されてゐました。で、ハアキユレスが、大勢の逃げるあとを追つかけてゐる間

に、珍らしく思つて一本の毒矢を拾ひ上げて見ました。ところが運の悪いことには、用心していぢらなかつたので、ついその矢を取りとおしました。しかも落ちたのが丁度一本の足の上だつたのです。矢先についた毒はたちまち身體にまはりました。可哀さうに！　親切なホラスはどつかと倒れて死んでしまひました。

やがてハアキユレスは洞穴に歸つて來ましたが、ホラスが死んで横たはつてゐるのを見ると、自分のしたことを大變後悔しました。けれども、いつものやうに、ハアキユレスの後悔するのはあまりおそすぎたのです。

かうなつた上は、お葬式のために柴をつみ上げその上に大事に人馬をのせて、燒いて灰にしてやるよりほかに仕方もありませんでした。昔のギリシヤ人は、死んだ人は、土に埋めないで、かうして燒いてゐたのです。

あくる日になりました。ハアキユレスはまた旅をつゞけて行きました。



最初の苦行

ハアキユレスはエリマンサスに着くと早速、猪の洞穴におしかけて行きました。ところが、猪はおそれてしまつて飛びかゝつて來もせず、牙を伏せてしまひました。そして、隙を見てどし〳〵逃げ出しました。ハアキユレスもつゞいて追ひかけて行きました。そしてとう〳〵雪のつもつてる處までやつて來ました。猪はまだそのまゝ雪の上を走りつゞけます。ハアキユレスもやはりそのあと

を追つて雪の上を走つて行きました。ところが猪が突然雪の割れ目を、ひどい勢で跳び越えたところ、その下りる勢でもつて、積つた雪の中に體が埋つてしまひました。

猪はもがけばもがく程雪の底にずんずん沈んで行きました。ハアキユレスは、もう猪は逃げられないと思つたので、自分の體に卷きつけて來た長い綱をほどきました。そして、端を輪にした捕り繩を作つて猪の方に投げかけ、うまくその足にまきつけました。それから捕り繩の先をしつかりと締めて、雪の中から猪を引つぱり上げました。猪は、もうすつかり弱つてゐたので、吠えたり蹴つたりはしても、わけなく四本の足を一しよにしばり上げることが出來ました。で、ハアキユレスはその猪を背中に背負つて、山を越えもと來た道をアルゴスの平野に向つてかへつてきました。

牛小屋の掃除

また、その頃エリスに、オーゼアスといふ王様がありました。この王様は二千頭の牛を持つて居りましたが、その牛舍は三十年間只の一度も、掃除させたことがなかつたのです。ですから、汚物が山のやうに溜つて、牛を出したり入れたりすることが出來ません。もし、この汚物を車で運ぶとしたならば、五千人の人が一年もかゝらなければ運びきれないのです。この牛舍を一日のうちに掃除して終へ！　といふのが、ユリシスの持出した第五番目の命令でありました。

そこでハアキユレスは、すぐにオーゼアス王のところへ參りました。

その時、丁度、王様は廣いお居間に晝寢をしてゐたのでした。けれども、王様は大變喜んで、すぐ、その廣いきれいなお居間へ通したのであります。

『ハアキユレス。よく來てくれた……今日はゆつくり遊んで行つたがよい……。』

『いや！　今日は王様に、お願ひしたいことがあつてお伺ひしたのです。』

『どんなことか……。』

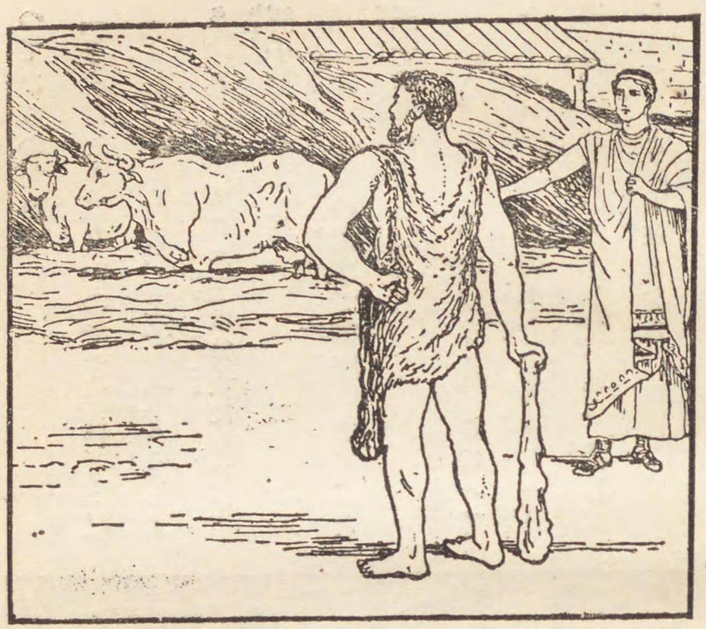
『王様の牛舍には、汚物が山のやうに溜つてゐるさうですが、一日で掃除して終へ！　といふユリシスの命令を受けましたので、私はそのお許を受けに上つたのです。』

『ほう……牛舍の汚物を一日に……。』オーゼアス王は眼をむいて驚きました。

『そんな馬鹿なことが出來るものかハアキユレス。お前は本當にそれをやつて見る氣なのか？』

『えゝ、かならず一日でやるつもりです。』

『ほう。偉い決心だな。――若し、そんなことが出來るなら、わしはお前に三百



最初の苦行

頭の牛を褒美としてあげやう。』

『本當ですか、オーゼアス王。』

『本當だとも、本當だとも……。』

と、王は申しました。

ハアキユレスは飛び立つ程喜びました。

『それでは、誰れか證人を立てゝ下さい。』と王へ申し立てました。

王は、それをきくと、急に不機嫌な顔をいたしました。

『それでは、お前は、このわしを疑

つてゐるのだね。』

『そんなことはないのですけれど…。』

『よし、そんなら、王子を證人にしよう。』と、オーゼアス王は侍女に命じて、王子を呼びました。

『父上、なんの用事で御座います。』と王子は申しました。

『おゝ、王子よ。實はなア、このハアキユレスが、わしの牛舍の汚物を一日に掃除するといふことだ。で、若し、そんなことが出來るなら、わしは、

ハアキユレスに三百頭の牛をやらうと約束したのだ。で、お前にその證人になつて欲しいのだ。』

『よう御座います。然しそんなことが出來るのですか、ハアキユレス。』と王子は大變驚いて云ひました。

ハアキユレスは、そこで早速仕事にとりかゝりました。

ハアキユレスは、たゞ強いばかりの英雄ではありません。人並み外れて賢い男でありました。ですから彼は、王宮の近くに、アルフエス、ペネスといふ二つの川が流れてゐることを、最初に、ちやんと見ておいたのであります。

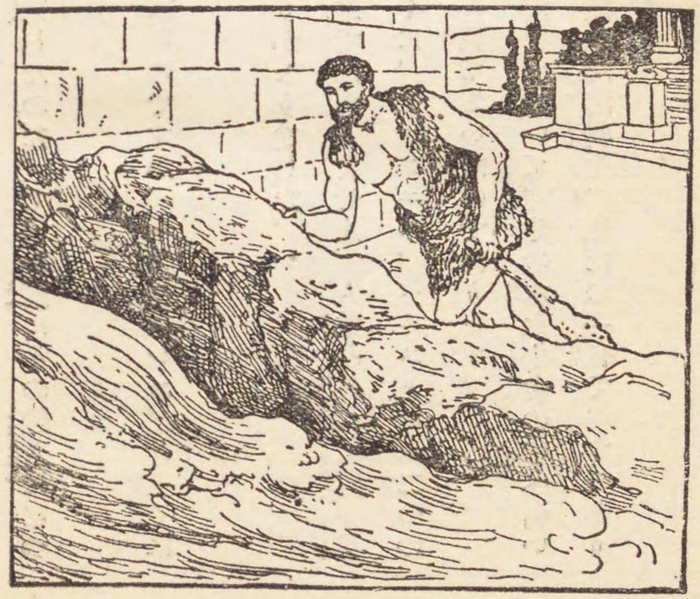
彼は、この二つの川の間に、一つの運河をひらいて、その水を牛舍の中へ引いてきました。そして三十年間のうづ高く積つた汚物を、唯だの一日で、すつかり河の中へ流し落して終つたのであります。

オーゼアス王は、これを見て、ハアキユレスの智慧のあるのに驚きました。

『なる程。なる程。運河を造つて、流して終へばいゝのだ。』

わけのないハアキユレスの仕事を見た王は、急に牛を三百頭やるのがをしくなつて來ました。そこで、オーゼアス王はいろんな口實をつくつて牛をやることを斷らうとしました。

ハアキユレスは大層怒りました。そして、たうとう法廷へ訴へ出たのであります。



す。そこで、王子が證人として呼ばれましたが、正直な王子は、あつたまゝの話をしましたから、オーゼアス王の敗訴となつて、三百頭の牛をハアキユレスにやつて終ひました。しかし、あまり心のよくない王は、その復讐に、ハアキユレスと王子を、放逐して終つたのであります。

鐵の爪の小鳥

アルカヂヤの山の中にスチンフアラスといふ町がありました。その町の近くにスチンフアラスの小鳥といふ意地惡な鳥が澤山、があ〳〵騒いでゐる沼がありました。この鳥は、爪と嘴とが鐵で、翅の先は矢のやうに尖つてをりました。食べ物が欲しくなると獸でも人間でもかまはず攫みかゝつて來て、その鐵の爪で引き裂いて食べてしまふのです。それからすーつと自分の沼へ飛び歸へつて行くので

す。

ハアキユレスの今度の仕事はこの欲張り鳥どもを平げるか、それとも二度と歸つて來ないやうに退つぱらつてしまふかすることでした。ところがこの鳥の住んでゐる沼のまわりは一面に浮き砂が擴がつてゐて、誰でも鳥のゐる近くまで近よつて行くとぶく〳〵と砂の中に沈んで、生きたまゝ埋められてしまふのです。さて、ハアキユレスはどうしてこの難しい仕事をやるでせうか。

デルフオイのお告げ場の神様アポロには一人の義兄弟がありました。バルカンといつて跛でしたが、火の神様で、鍛冶屋さんをはじめその他金物の仕事をしてゐる人々を治めてゐました。シシリイのエトナ山の下や、火を吐いてゐる山にその鍛冶場がありました。火を吐く山をボルカノ火山といふのはバルカンの名に似せて云ふのです。このバルカンはハアキユレスと仲よしでしたから、スチンファラスの小鳥を脅かすために、眞鍮のガラ〳〵を拵へて呉れました。

最初の苦行

ハアキユレスはそのガラ〳〵をもつて、人食鳥の住んでゐる沼の近くの小さな岡の上に行つて、坐りました。その鳥は沼のまわりをひら〳〵飛びまわつてゐましたが、ハアキユレスが急にそのガラ〳〵を鳴らしはじめたので、びつくりしました。そして不安さうに眺めました。

鳥が恐れゝば恐れる程ハアキユレ

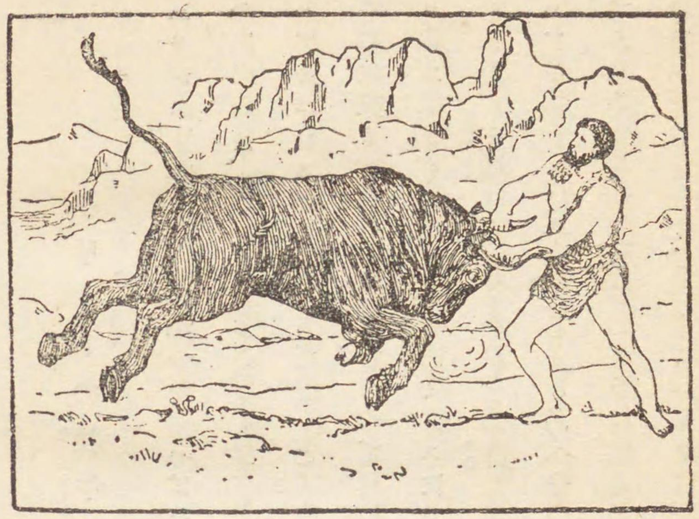
スはいよ〳〵激しく音を立てました。とうとう鳥はばた〳〵と沼を飛び立つて遠くへ行きました。そこでハアキユレスはガラ〳〵を捨て、弓矢を取つて出來るだけ澤山の鳥を射おとしました。少し位は逃げましたが、それも海を越えて行つてしまつたのでもう歸つては來ませんでした。そのおかげでこの近所の人達は、今まで苦しめられた鳥の害がなくなつたのでその後皆ずつと幸福に暮すことが出來ました。

クリートの牡牛

ユリシス王から言ひつかつた、ハアキユレスの第七の仕事は海の向ふのクリートの島に行き、そこを荒してゐるとても強い野牛を生捕りにして歸ることでした。

ハアキユレスが濱へ下りて行くと丁度クリート行きの船がありました。で、早速それに乘り、何日かの間かゝつて目指す島へつきました。船から下りるとハアキユレスはすぐに島の王樣のミノスにお目通りして牡牛をつかまへるお許しを願ひました。王樣は心よくそれをお許しになりました。

ハアキユレスは牛の居るところへやつて行きました。しばらくするうちに、向の方からその牛が氣狂ひのやうに跳んで來て、ハアキユレスを角で突き上げやうと身構へをしました。ハアキユレスは、ぢつとして牛の來るのを待ち構へてゐま



したが、いよ〳〵その荒牛が一聲高く吼えながら頭を下げて突きかゝつて來るとぱつと横に飛びながら、角をつかまへて「ウーム」とねぢ倒さうとしました。牛はおそろしい勢で手向ひました。が、ハアキユレスの方が牛より強かつたのです。角をもつたまゝぐい〳〵引つぱつて、船があるところまでつれて來てしまひました。それから、舟に積み込んでそこにあつた荒縄でしばりつけましたから、牛は動くこともできません。船はギリシヤをさして歸つて行きました。

荒れ馬

ハアキユレスの第八番目の仕事はスレースの國の王様デイオメデスの持つてゐる人食ひ馬をつれて歸ることでした。スレースといふのは、サルタンの治めてゐるトルコの領分になつてゐます。デイオメデス王といふのは酷いことが好きで、情といふことを知らぬ惡い王でした。澤山の馬を飼つてゐたのは他所から來た人間を食はすためだつたのです。外國人がスレースの國へ來ると、この王様はいつでもすぐその人達を引つ捉へて厩の中に投げてやります。すると、馬は我勝ちによつてたかつてこの不幸な外國人を引き裂いて食べてしまふのです。まるで恐ろしい狼の群のやうなものではありませんか。

ハアキユレスはそこへ行つて先づデイオメデス王に、その馬をすつかり下さいとたのみました。しかしこの惡い王樣が、何でそれを許しませう。それを斷つた上にハアキユレスを馬に食はさうと考へたのです。

そこでハアキユレスは、いきなりデイオメデス王をひつゝかんで、自分の代りに馬に投げてやりました。馬は王樣を粉々に引きさいて、見るまに食べてしまひました。それから

ハアキユレスは、次から次へと馬をつかまへて順々に縛りつけ、待たしてあつた舟に乘せてギリシャにもつて歸りました。

ハアキユレスが、人食ひ馬をつれてユリシス王の城の前まで來ると、王樣は、馬の綱をといて森の中に勝手に行かしてしまへと言ひつけました。ハアキユレスは馬を森の中へ追ひ込みました。この森には恐ろしい野獸がたくさん住んでゐました。野獸は馬を粉々に引き裂いて食つてしまひました。

三、終りの四つの苦行

女王の帶

アマゾン人はその頃、今でいふアルメニヤの地方に住んでゐて、大變戰爭好きで名高い國民です。しかも國民はすつかり女ばかりでした。皆んなは自分の夫のことなどはまるで氣にかけてゐません。夫の處へ行くといへば、まづ何にもすることがなくつて退屈な時くらゐなものでした。子供が生れてもそれが女の子ならば、できるだけ世話をやいて色々の力技や戰爭の練習をさせて大切に育てますが、もし男の子だと、まるで育てゝも骨折り損だと思つてちつとも可愛がりません。

アマゾンの女王ヒツポリート

猫の子のやうに放り出しておくか、でなければどこかへ捨てゝしまふといふ風でした。

その時分のアマゾンの女王はヒッポリートといふ人でした。このヒッポリートはいつも立派な帶をしてゐました。その帶は、ヒッポリートの父マースといふ戰爭の神様からのゆづりもので、金や寶玉で作つてありました。ユリシス王はこの立派な帶のうはさを聞いてゐたので、どうかしてそれを自分の娘のアドミートのものにしてやり度いと思つてゐたのでした。アドミートは、アルゴスの大きな社の巫子で、ギリシャの神神の女王、ジュノーといふ女神につかへてゐました。

ユリシス王は、ハアキユレスを小アジヤにやつて、その帶を取つて來させやうとしたのです。

ところで、今度の仕事のむづかしい事といつたら、並大ていのことぢや、ありません。何故といつて、女が一生懸命になつて勇氣を奮ひおこした時には、男や野獸などよりも、もつと強くなるものです。こんな男のやうな女ばかりでしたからもし自分の幼い可愛い小供をいためられるとか、何かそんなことが起つたときには、鬼のやうに憤つて、さつそく押しかけて行くのでした。

こんな風に、戰國時代のアマゾンの女達は身體の力でも元氣でも、どんな強い男よりも、もつと勝つてゐたのです。だから今度はハアキユレスも要心して一人では行きませんでした。ギリシャ一といはれる勇士五六人に、一緒に行つてくれるやうに頼みました。

さて、ヒッポリート女王は、ハアキユレスが自分の帶を欲しがつてゐるといふことを聞きこみました。そしてそれはデルフオイの神殿でアポロの神が命令した十二の苦行の一つであつて、妻と小供を殺した罪ほろぼしに、ユリシス王の命つ

けだと云ふことも知りました。そこで女王は大そう同情して、自分から進んで氣持よくハアキユレスに帶をやらうと言ひました。けれども、他のアマゾンの女達はこれをきいて、ハアキユレスがそんなに帶が欲しいのなら戰爭をして取り合ひをするのが當り前だと言ひ張りました。

こんなことからたうとう戰爭になりました。そしてハアキユレスとギリシヤの勇士達とが一働きした頃には、アマゾン軍はとても勝利はおぼつかなくなりました。

た。ハアキユレスはヒツポリート女王をとらへました。しかし女王が帶をすぐに渡したので、ハアキユレスは女王を赦してやりました。

帶を分捕つたハアキユレスは、喜び勇んでタイリンズに歸つたのでありました。

ゼリオンの牛

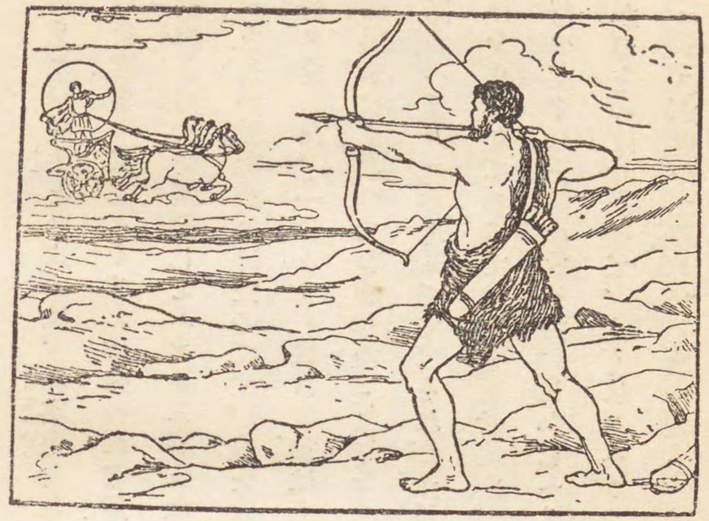
ハアキユレスの第十番目の仕事は大そう長い旅をして、地中海の向ふの端まで行かなくては出來ないことでした。

その頃ゲーデス島の王樣で、頭が三つ、體が三つ、手と足が六本づゝあるゼリオンといふ名のおそろしい巨人がゐました。ゲーデスといふのは、スペインの南岸からすぐ向ひにある島で、今ではカヂイスといふ町もあります。無論その時分には町などといふものはなく、たゞ大變美くしい牧場があつただけでした。この

三つ頭のゼリオンは、その牧場で澤山の獸を飼つてゐました。ヌオースロスといふ二つ頭の犬がゐて、ゼリオンの手助けをしてをりました。この犬は一度に狼二匹を相手にするといふ強い犬だつたのです。

ゼリオンの牛といふのは、赤茶色をした毛色の美しい牛です。ハアキユレスはそれを捉まへて、タイリンズへつれて歸らなければならないのでした。

棍棒と弓矢で武裝してハアキユレスはアフリカの濱に渡りました。そして西へ西へと長い旅をつゞけたのです。夜となく晝となく、炒るやうに暑い沙漠を進んで行きました。一日々々と暑さは加はり、喉の乾きはひどくなつて、もうとても辛棒出來なくなつてきました。そのときハアキユレスの疲れた眼にうつゝたのは、太陽神ヘリオスの馬車です。それが土地にあまり近い處を走つて、はげしい熱で大地を焦がしてゐるではありませんか。ハアキユレスはヘリオスに、もつと遠くへ行つてくれと叫びました。しかしヘリオスは見向きもしません。ハアキユレスはかつとのぼせあげて、すぐにもヘリオスを射たうとしました。もしこの時ハアキユレスが射つて殺してしまつたら、もうこの世には、太陽といふものはなくな



つてしまつてゐたでせう。けれども、ヘリオスもびつくりして許しをこひましたから何事も起らなくてすんだのです。そして、西の方へ路をつゞけて行きさへすれば苦しい旅もすぐ終りになることを教へました。

やがてハアキユレスは、大きな二つの岩蔭に太陽の馬車が沈んで行くのを見ました。その岩が境になつて、太西洋と地中海とを分けてゐるのです。

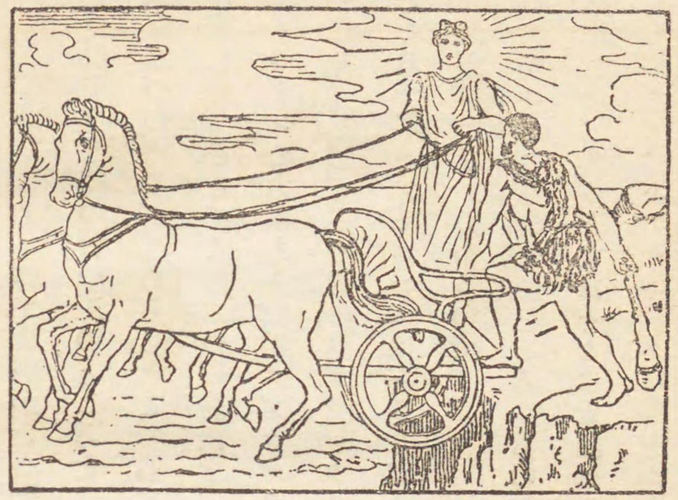
ハアキユレスは、これではヘリオスの

光がなくなつてしまひはすまいかと心配しだしました。そこで二つの山こぶが附き合つたやうな陸の首つ玉のところを、棍棒ではげしく叩きました。強い力で叩かれた二つの山こぶはあちらとこちらに割れて、海の水がどつと兩岸の間に流れこみました。そこでこの二つの岩山を、「ハアキユレスの柱岩」と今でも言ふのです。スペインの方にあるのがジブラルタル岩で、アフリカの方にあるのがシユータ岩です。そしてその間のジブラルタル海峽は今でもあります。

ところで、ハアキユレスはどうしてスペインに渡つていつたらいゝでせう。前には海がさか卷いてゐるのです。

ハアキユレスは海峽のところからのぞいて、太西洋の大波のうねつてゐる向ふを見ました。するとまだそこに太陽の馬車がゐたのです。

ヘリオスは、ハアキユレスに聲をかけて、太西洋の波の中へ入つて休む前に、



馬車にのせてつれて行つてやらうと言ひました。ハアキユレスは喜んでお禮を言ひました。太陽の馬車は水際まで來てハアキユレスをのせました。海は次第に靜かになつて、ハアキユレスはまもなく向ふの島に上陸することができたのでした

次の朝、ハアキユレスは早くから起きてゼリオンの牛をさがしに行きました。そして、間もなく海べの綠の美しい牧場で靜かに草を食つてゐる牛を見つけました。「ゐたぞ。」といふまもありません。ゼ

リオンと牛飼ひと二つ頭の犬とははげしくわめき聲を上げながら、ハアキユレスを目がけておどりかかつてまゐりました。ハアキユレスは棍棒を振り廻してその場に犬を叩きつけ、それから牛飼ひに向ひました。(この牛飼ひは、まあ人食ひといつてもいゝ奴でした。何故ならこいつは、人を殺しては、その肉で牛を養つてゐたのですから)そしてすぐこの牛飼ひも殺し

てしまひました。

さて、後にはゼリオンが殘つたゞけです。そこでハアキユレスはゼリオンに向つて、わけを話して、ぜひ牛を出して下さいと頼みました。ゼリオンは眞赤になつて怒りました。そしてハアキユレスに勝負をしようではないかとどなりつけました。かうなつては仕方がありません。ハアキユレスはゼリオンと勝負しました。そしてとう〳〵ゼリオンも殺してしまつたのです。

これで、いよ〳〵牛は自分のものになつたので、ハアキユレスは陸からギリシヤに連れかへらうとしました。しかしこのきれいな牛を、どうして海峽を渡らせやうかと迷ひました。もし無理をして、アフリカの沙漠を通つて行かしたなら、牛どもはみんな喉をかわかして死んでしまふに違ひありません。何故ならヘリオスが、土地に近過ぎる所に馬車を走らしてゐるのです。とても暑くて生きてはゐられません。

そこでいろ〳〵考へたハアキユレスは、スペインから行かうと決心しました。そこからピレネー山を越えてフランスに入り、アルプス山脈を越えて、イタリーに入るのです。そうすれば船があつて、わけなくタイリンズに牛をつれてかへれます。

ハアキユレスと牛とは、北へ向つて出發しました。ところがこゝで、ハアキユレスはこの國越しをして、南フランスに入りました。そして難なくピレネーの山の人とはげしい戰爭をするやうなことになつてしまひました。この國の人が牛を盜んで、自分のものにしようとしたのです。何百人もの人々がやつて來ました。が、ハアキユレスは得意の弓矢でたちまちみな殺しにしてしまひました。すると後に殘つたものは石を投げはじめました。その爲にハアキユレスは危ふく負けか

けかけましたが、その時にはかにジユピターの神が、この戰場に大きな岩を雨のやうにおとして呉れました。

そこでハアキユレスは敵をめがけて、その岩を取つては投げ、取つては投げしたのです。敵はおどろいて逃げてしまひました。この岩はストーンヘンジといふ處にあつて、岩程の大きいものでした。そして今でも尙、南フランスに殘つてゐるといふことです。

それからハアキユレスはアルプスを越えて、イタリーの中部につきました。後にローマの出來たところです。その頃は誰もそんな大きな町が後に出來やうなどとは夢にも思ひませんでした。しかしあの七つの岡は、やはりそこにありました。そしてタイバー川も流れてをりました。

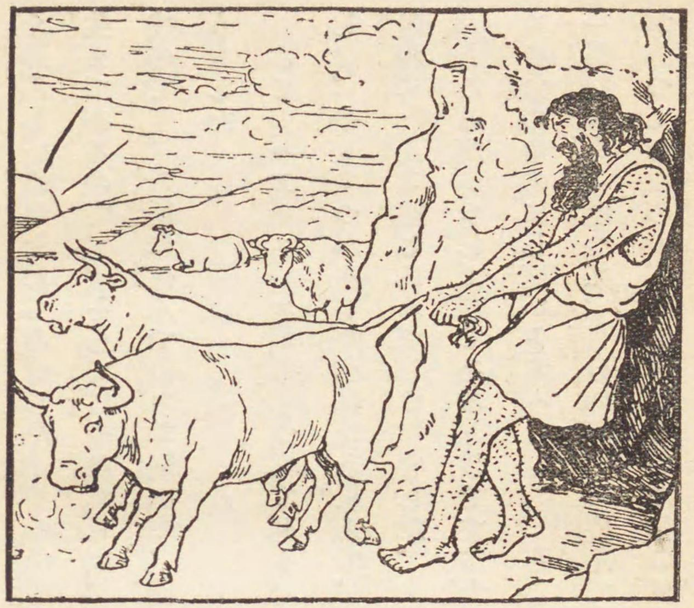
ハアキユレスは牛をつれて、カンパニヤといふ處を通り、七つの岡の立つてゐ

る大ローマ平野の草原を通つて行きました。するとタイバー川が二本の細い支流にわかれた所に來ました。一つの支流には中に長い島があつて、その兩側がずーつと淺瀨になつてゐました。ハアキユレスは、すぐそこを選んで牛をつれて、川の中をぢやぶ〳〵と渉つて行きました。そして、アベンティーンといふ丘に近い向ふ岸に上りました。

アベンティーンの丘の下には一つの洞穴がありました。この洞穴の中にはカクスといふおそろしい野蕃な大男が住んでゐました。その洞穴は今でもやはりそこにあります。この大男カクスはバルカンの息子で、バルカンは前にハアキユレスに眞鍮のガラ〳〵をくれた人です。併しそんなことがあつても、カクスはハアキユレスとは友達でも何でもありませんでした。それどころかカクスは、誰とも友達らしいつき合ひはしませんでした。馬鹿に力が強くつて、見たところこの上なく恐ろしい恰好をしてゐました。まるで針のやうな毛がもじや〳〵と身體一面に生えてゐるのです。そして口や鼻からは、火を噴き出しては、人々を燒いて困らすのです。近所に住んでゐた羊飼ひや、他の人々は、大そうカクスを怖がつてをりました。

さて、ハアキユレスが牛をつれてタイバー川を渉つた時は、もう日の暮れ方でした。牛もすつかりくたびれたと見えて、タイバー川とアベンティーン丘の間の牧場にみんな寢ころんでしまひました。

ところがかうして寢てゐるときです。大男のカクスがそれを眺めて、どうしても自分のものにし度いと考へました。そこで、そーつと爪先で立つて歩いて來て、一番いゝ牛を選つて、自分の洞穴へ盗んで行つてしまつたのでした。ところが土が濕つてゐたので、洞穴へつゞいた牛の足跡がハアキユレスに見つかるかも知れ



ないと思つたので、牛の尻尾をつかんで後ろ向きに引きづりこみました。

次の朝、ハアキユレスは目をさますと、牛の數の足りないのに氣がつきました。がたゞ、夜の間にどこかへ迷ひこんだぐらゐに思つて、足跡をつけて行つて見ました。すると驚いたことには、どの足跡も、との足跡も、みんなハアキユレスが寢てゐた方へ向いてゐて、そこからどこへも行つてゐないのです。これは變だなと思つたハアキユレスは、アベンティーンの丘中を長い間かゝつて探しまわりましたが見つかりません。自分が不注意だつたからしかたがない、とあきらめて、殘りの牛をつれ、南の方へ出發して行きました。

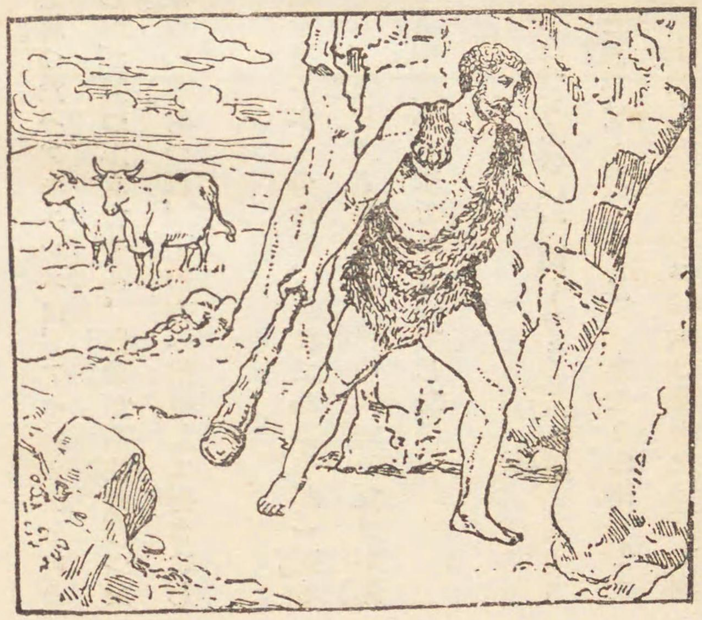
ちやうどカクスの洞穴の入り口の前を通りかゝつた時、連れてゐる牛が一匹もうと吼えました。するとすぐその後から、耳をふさいできく程の大いこだまが聞えて來ました。その音はたしかに丘の眞中邊から來てゐるのでした。

『おや。』

ハアキユレスは立ち止りました。そして耳をふさいで聞くやうな牛の鳴き聲は、ゐなくなつた牛が吼えたにちがいないと思ひました。そこで、あまり面倒なことをしないで岩山の中へ入つて行く工夫をしました。カクスは大きな平たい石で洞

穴の入り口をしつかりと蓋してゐました。そして中でハアキユレスの悪口を言つてゐるのです。

ハアキユレスはひどく腹を立てゝしまひました。ぎり〳〵歯ぎしりをしながら入り口を突き破らうと三度ばかり一生懸命で押してみましたがとても駄目です。ハアキユレスは、すつかり疲れてしまひました。が三度目にひよいと目をあげて上の方を見ますと、洞穴の上の少しあとによ



つた所に、ごつ〳〵した岩山があるのに氣づきました。この岩山は、眞直に立つてゐないで、一方に傾いて川の上にのしかゝつてゐました。そして根元のところは深く土の中に埋つてゐました。ハアキユレスは丘の上に飛び上つて、その岩山を念を入れてよく調べました。そしてうゝと力を入れて、その岩山に當つて見ました。すると、右の方から押せば、左の方へごろ〳〵と轉がつて、うま

く動かせることが解りました。で、手を休めて、はーつと大息をつきました。

やがて、その岩山をつかむで全身の力をこめて引き倒しました。土地は破れて四方八方に割れ目が出來、ゆるんだ土や石ころが丘の下にがら〳〵ところがつておちました。

も一度ハアキユレスは手を休めて、それから又體中の力を出して、その岩山を押しました。岩山はがら〳〵とはげしい音を立てゝ引くりかへりました。それから眞逆様にころがつて川の中にどぶんと落つこちました。丘の上には大きな穴が殘りました。たうとうカクスの洞穴はぽかりと裂けて、日の光りが這入りこむやうになりました。カクスは穴の中で墓のやうに蹲んで、體をぶる〳〵ふるはしてゐました、がそれは狡い手で、ハアキユレスに油斷させるためだつたのです。隙を見てこの世の人とも思はれぬ物凄い叫びをあげたと思ふと、急に口から火を噴

いて、ハアキユレスを燒き焦がさうとしました。

カクスが口から火を吐くのといつしよに、眞黑な煙が顎から噴き出て、ハアキユレスにはカクスがどこにゐるのか解らなくなつてしまひました。そこでハアキユレスはしばらく見てゐましたが、ちよつと頭が見えたのでいきなりカクスの上

に跳びかゝり、兩手で喉をしめつけやうとしました、二人は死にものぐるひです。唸り聲を立てながら前や後におし合ひへし合ひしました。しかしその内このいやな化物の力は、次第々々になくなつて來ました。腕の力はゆるんで眼の玉はもう飛び出してしまふばかりでした。やがてどさりと土の上にころびました。ハアキユレスはカクスを締め殺したのです。

それから、ハアキユレスはカクスが内側からかけた楔止めを外して、入口の平石をそこへ投げとばしました。そして盜まれた牛をつれ出し、足をつかんでカクスを外へ引きずり出しました。大勢の羊飼ひは周りに集つて何時間も眺めてゐました。近所に住んでゐた一人の人は、森の中に祭壇をつくつて、今後ともハアキユレスの恩を忘れない樣に毎年その日にお祭りをすることにしました。

ハアキユレスは牛をつれて道をつゞけ、船に乘つて無事にコリントの地峽に

終りの四つの苦行

きました。地峽を通つてゐる時、また一人の大男が邪魔をしにやつて來ました。この恐ろしい大男は大きな岩をつかんでハアキユレスをめがけて投げつけるのです。その岩は大變大きくて重く、二十四匹の野牛を二匹づゝ荷車につないで引つぱらしても動かせない程でした。けれど岩はハアキユレスに當りませんでした。それは、岩が頭に飛んで來るのを見ると、まるでクリケットでするやうに、ハアキユレスは、棍棒でその岩を、叩きとばし

てしまつたからです。そしてあべこべにハアキユレスはこの大男を殺して道をつづけて行きました。

次の日、牛もろとも何の變りもなく無事にタイリンズに着きました。

ヘスペリデスの林檎

もうユリシス王に言ひつかる仕事は二つしか殘つてゐません。それさへ濟めば、ハアキユレスは全く自由になれるのです。

第十一番目の仕事は、ヘスペリデスの園になつてゐる金の林檎を取つて來る用事です。ヘスペリデスといふのは姉妹で、林檎を盗まれないやうに番をしてゐるのが役目でした。この林檎はジユピターの神が植ゑたもので、結婚した時女神のジユノーがお祝ひに呉れたものでした。ヘスペリデスは番犬の代りに、頭が百あつてちつとも眠らないといふ龍をもつてゐました。

ハアキユレスは旅に立ちましたが、どこに園があるのか解りませんでした。それであちらこちら尋ねまわつて長い日數をかけてしまひました。何度も無駄骨を折つたあげく今度はアフリカに入りました。五六日、沙漠の旅をつゞけて行くう

ちに、とう〳〵、肩に天を擔いで天が地に落ちないやうにして立つてゐる、アトラスのところまでやつて來ました。

『一寸おたづねしますが、ヘスペリデスの園はどこにあるか御存じではないでせうか。』

と、ハアキユレスがたづねました。

『え〵、知つてゐますよ。こゝからすぐです。けれどその園には頭

の百あるちつとも眠らない龍が見張りしてゐますよ。』

とアトラスは云ひました。ハアキユレスはそれに答へて、

『それは知つてゐます。が私はその龍を殺してゞも、金の林檎を取つて歸らなければならないのです。』

『では、よかつたら私がヘスペリデスのところへ行つてあげませうか。そして、あなたの事を話しておだやかに林檎を呉れるやうに頼んであげませう。が、もし私が行くとなると、あなたはこゝで空が落ちないやうに私の代りをしてもらはねばなりませんがね。』

そこでハアキユレスはアトラスに禮を言つて、さうして貰ふことにしました。

アトラスは天をハアキユレスの肩にのせ變へて去つて行きました。

しばらくするとアトラスは、金の林檎を三つもつて歸つて來ました。そして言

ひました。

『ヘスペリデスはよろこんであなたの困つてゐるのを助けようとしてゐます。すぐにこの林檎をくれました。がこれをユリシス王の處へ持つてかへつて見せたら是非持つて來てかへして下さい。』

しかしアトラスは考へました。長い間空を肩の上に載せて立つてゐたので大變疲れてゐる、だから自分の代りをハアキユレスにさせておいて自分はどこかへ行つてしまふと實に工合がいゝなと考へました。そこで林檎をもつたまゝ行きかけました。ハアキユレスはどなりつけました。

『もしお前が行つちまうなら俺はこゝにゐやしないぞ。肩をはづして勝手なところへ天を落してやる。さうすればお前も死んでしまうんだから。』

アトラスはやり込められてびつくりしました。

『まあ、待つてくれ。』

といつて、もとのやうに天を擔ぎました。ハアキユレスは林檎をもつて、タイリンズにかへりました。

ハアキユレスが歸つたあと、そこへ英雄バーシユーズがゴルゴンといふ怪物の頭をもつて來ました。そしてそれを天を擔いでゐるアトラスに見せました。するとアトラスはすぐ石に變つてしまひました。（ゴルゴンを見たものは石になるのです。）

だから今でも、アトラスはそのまゝそこに立つてゐます。沙漠の空に延び上つた大きな石の山が卽ちそれです。その足は沙漠の上にあつて肩には雲がかゝつてゐます。

ユリシス王は金の林檎を取つて來させはしたものゝ、それを見ると急に自分で

持つてゐるのが怖くなりました。でハアキユレスに、ヘスペリデスのところへかへして來るやうにと言ひつけました。そこで、ハアキユレスはそれを持つて行つてかへしました。

三つ頭の犬

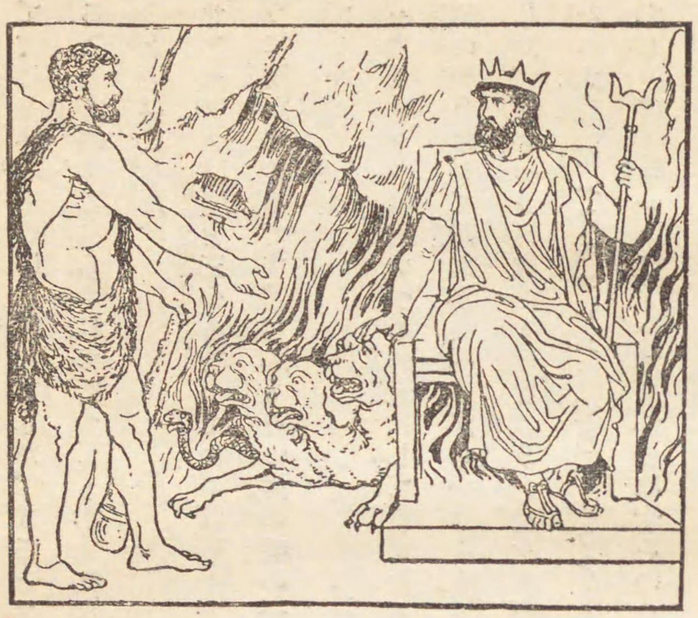
さて、いよ〳〵この面白いハアキユレスの苦行の話の一番しまひに來ました。それは地の下のハデ

スといふ處へ行つて、そこの門番をしてゐる三つ頭の大きな犬を生け取りにして來ることです。

ハデスといふのは、プリユトーといふものが治めてゐる地下の國で、そのまはりをスチツクスといふ川がかこんでゐます。昔のギリシヤ人は、死んだものゝ魂は體から離れるとハデスに下りて行つて、そこで善い事、惡い事にかゝはらずこの世でした事はすべて、三人の裁判官に調べられるものと信じてゐました。一度ハデスに下つた魂は、どれもこの世の中にかへつて來ることは出來ません。そのわけは、スチツクス川には橋がなく、おまけに門のところには三つ頭の犬のサアベラスが見張りをしてゐるからです。ハデスに來た魂は年寄りのチヤロンといふ男が渡し船にのせてスチツクス川を渡してくれますが、決してかへしては呉れません。又サアベラスも門を這入るのは許しますが、出ることはけつして許さないの

です。

ハアキユレスの魂はまだ體の中にありました。ですから、ハデスに下りて行つて又生きてかへつて來ることが出來たのです。はじめの内キヤロンは、ハアキユレスの魂は體と一しよにあつて、とても重いからと言つて渡すのを斷りました。し



かし、とう〳〵せがみ倒されて渡しました。ハアキユレスが門に着いたところ、サアベラスはひどくうなつたり、吠え立てたりしました。體のついて來た魂なんか一度も見たことがなかつたからです。サアベラスは吠えながら尻尾を足の間に下げて、とう〳〵プリユトーの椅子の下に入り込んでしまひました。

ハアキユレスはプリユトーに向

つて、こゝへ來たわけを話しました。するとプリユトーは、サアベラスをつかまへることが出來るならつれて行つてもかまはないが、是非かへしてくれなくては困るといひました。

サアベラスは頭を三つも持つてゐるばかりでなく、とても大きくつて、獅子のやうに鬣があるのです。しかもその鬣の毛の一本一本はみんな小蛇で、尻尾は大蛇でした。

ハアキユレスは、いつも外套にして着てゐるネメアン獅子の毛皮をぬぎ、それを盾のやうにして前にかまへながらいきなりサアベラスの喉をつかんで引きづりました。サアベラスは振りはなさうと身をもがきながら吠えました。尻尾になつてゐる大蛇は、ハアキユレスに巻きつかうとしたり咬みつかうとしたりしました。しかしハアキユレスは、一寸もかまはずそのまゝそれを引つぱつて、スチクス川

をわたりました。そして地上からハデスに下りて來てゐる陰氣な暗い穴道を通つて、やがて陽の光の輝やいてゐるこの世に上つてしまつたのです。陽の光を見ると、サアベラスはまるで氣狂ひのやうに暴れまはり、口から泡をぶく〳〵ふき出しました。そしてその泡の落ちた地の上には、氣味わるい毒草がひよこ〳〵と生へました。

ハアキユレスはさうして、遙るばるタイリンズまでサーベラスを引つぱつて行

きました。けれどもユリシス王は、サーベラスを見ると、すつかり怖れふるへ上つて、うろたへながら逃げてしまひました。ハアキユレスは又サーベラスを引つぱつて地下のハデスにつれて行きました。そして渡し守のチヤロンに渡して川を渡らせ、門のところへやつてもらひました。

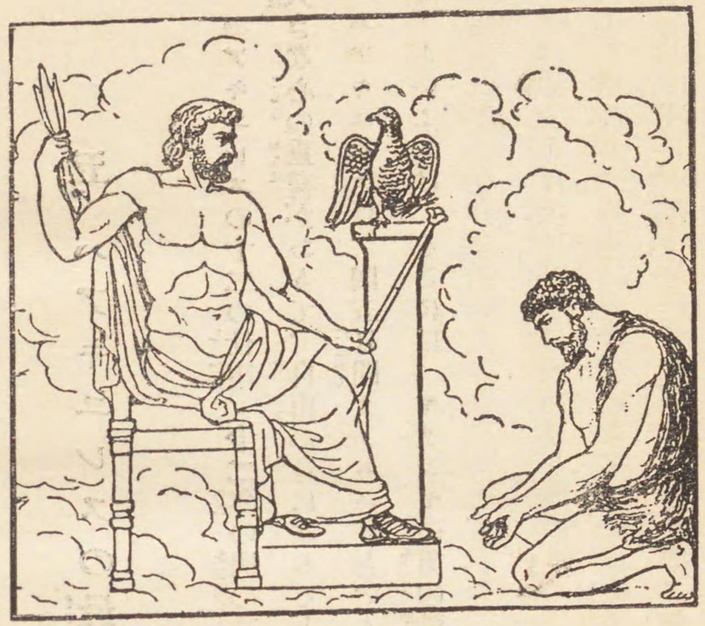
五、ハアキユレスの最後

ハアキユレスの十二の仕事、十二年の間の苦しい務めはやうやくすみました。大きな心の重荷がおりて、自由の身になることができたのです。

ハアキユレスは、四五日間オリムパスといふ非常に高い山の頂上に旅行しました。といふのは、そこには、ギリシャの男の神達の親であり王であるジユピターがゐらつしやるからです。

ジユピターは次のやうに言ひました。

『よくやつた。お前は忠實なしもべだ。お前は自分の犯した罪の爲に苦しんだ。そしてはげしい苦行をして罪を償つたのだ。もう立派な清い身體だ。しかしこれ



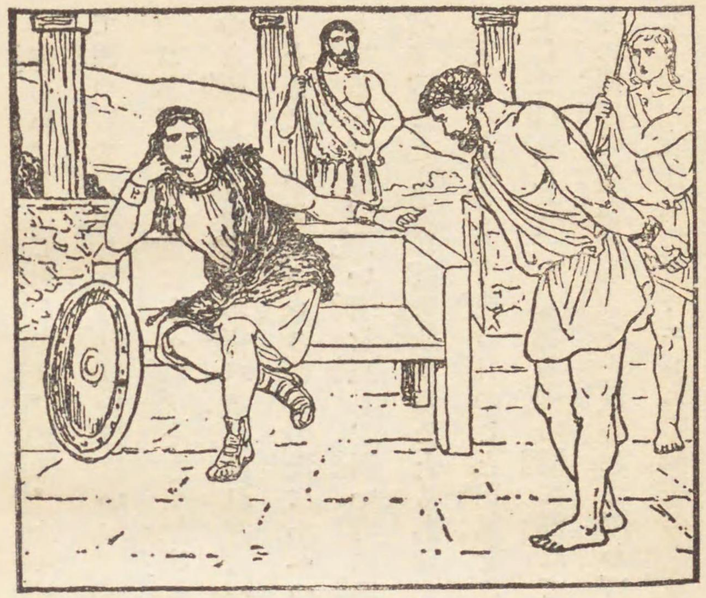
からは心を平和にするために苦勞せねばならぬぞ。岩山や、岩の間の化物や、野獸を平げる强い力はもういらなくなつた。お前の勇氣と元氣とはよくわかつた。お前には何の欠けたところも無い。が、これからは同じやうに心の元氣をよく學ばねばならぬ。惡いものを罰し、弱いものを助けるためにお前の力を使ふことを心得ねばならぬぞ。

苦しめ。そして强くなれ。怒れ。けれども怒りをぐつとおさへよ。困れ。そして困つても我慢しなければいけない。

さあ、お前の世にかへれ。そして仕事をはげめ。今までお前がしたよりも、もつと難しいもつと骨の折れる、けれどもづつと上等な仕事をするのだ。』

そこで、ハアキユレスはこの世にかへつて來ました。そしてあちらこちらを搜しあるいては、惡い者を正し、弱い者は助け、悲しんでゐる者を慰めました。成功することもあれば失敗することもありました。

ところがたうとう或る日のこと正氣をなくして、大變惡いおそろしいことをしてしまひました。たちまち神の罰に觸れて心を苦しめました。正氣づいた時、三年の間罪の償ひをしようと決心して、わざと野蕃國の女王のところへ身賣りをしました。女王はハアキユレスの獅子の毛皮を取り上げて自分で着ました。そして



ハアキユレスには、蛇の着物をきせて家の中で女のする仕事をさせることにしました。ハアキユレスはよく辛棒してその言ひつけに從ひました。そうするのが自分の務めだと思つたからです。

三年の苦役の期間が終ると、ハアキユレスは又もジユピターのお情の言葉を受けました。それで獅子の毛皮を着てあちらこちらを歩き廻つて、惡いものをこらし、助けのない憐れなものを助けました。そのうち、ある國王のお姫様と結婚しました。お姫様の名前はデイアニラといひました。

さて、ある日のことです。ハアキユレスは妻と一緒に旅行してゐてある川のそばに來ました。その川には橋がかゝつてゐませんでした。その代りにネツサスといふ若い人馬がゐて、背中に人を乘せて渡してくれるのでした。ところが川の中程まで行つたスはデイアニラを人馬の背中にのせてやりました。で、ハアキユレ時、にはかに人馬はデイアニラをのせたまゝ風のやうに走り出しました。デイアニラはこわくなつたので悲鳴をあげ、ハアキユレスに助けを呼びました。ハアキユレスは一本の矢をはなちました。矢は人馬の心臟に當りました。人馬は死ぬる時、ハアキユレスは取りかへしのつかぬ事をしてしまつたといひました。そしてデイアニラに次のやうにさゝやきました。

『私のシャツをぬがして下さい。それは血で染つてゐます。それをかくして大切

にしまつておきなさい。若し夫があなたを捨てるやうなことがあつたら、何にも云はないでこのシャツを出してお着せなさい。そうしたらすぐあなたのところへ歸つて來ますから。』

ディアニラは人馬の言つたことを信じました。それでシャツを大切にかくしにしまひました。

ハアキユレスはそれからトラキンといふ處へ行つて住みました。

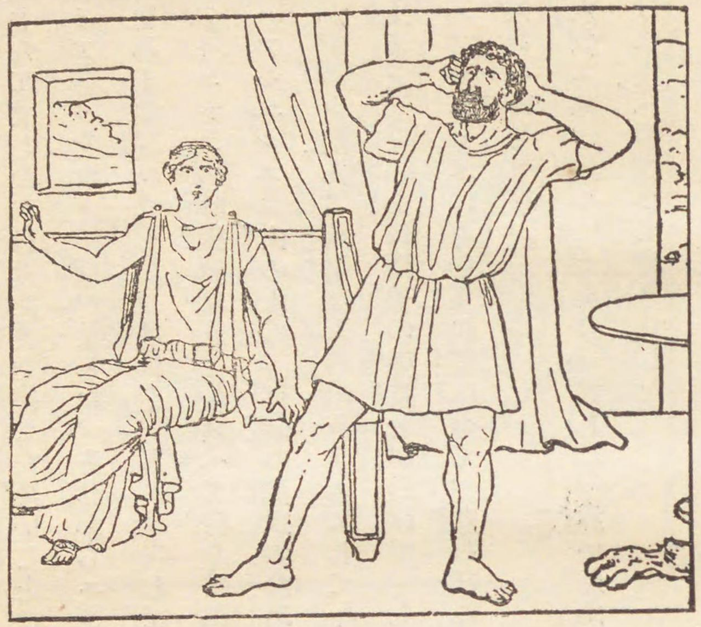
そして六七年の間は妻や子と一緒に樂しく暮しました。ところが、そのうち隣の國のある王様を征伐に出かけ、大勝利を得た上に、王様を殺して、その家族をとりこにしました。その中には王様のお姫様もゐましたが、ハアキユレスはこのお姫様がすつかり氣に入つてしまひました。そこでお姫様を自分の新しい妻にしようといふ、よくない考へを起しました。ハアキ

ユレスは何でも思つたとほりにするのが好きでしたから、こんどもさうです。むかしのことは忘れてしまつて、デイアニラを捨てゝしまひました。そしてデイアニラを悲しみと不幸の中につきおとしてしまひました。

ハアキユレスは今度の新しい妻と共にある山に出かけました。そしてそこに祭壇をつくつてジユピターに焼いたお供へ物をしようと思ひました。しかしハアキユレスはその時着るのに、丁度いゝ着物を持たなかつたので、本當の妻のデイアニラに使をやつて着物を少し送つてくれといつてやりました。

デイアニラは、あの人馬のネツサスの言つたシャツのことを思ひ出しました。そこで、デイアニラはそのシャツを、他の着物と一緒に送りました。

『このシャツを着たらハアキユレスはきつと自分のことを思ひ出して、すぐ歸つて來てくれるにちがひない。』



ハアキユレスの最後

デイアニラは心の中で呟きました。

ハアキユレスは何も知らず、その運命のシャツを着ました。

シャツには心まで毒がしみこんでゐました。自分が毒矢でうち殺した人馬の血が、しみ通つてゐたのです。シャツはぬぐことが出來ませんでした。毒が肉や骨の中に焼けこんでついてしまつたのです

ハアキユレスは激しく苦しんでう

めきたてました。自分が妻を捨てた惡いことは棚に上げて、そのシャツを送つたディアニラをひどく呪ひました。それからユリシス王や、自分に苦しみをかけた者をみんな呪ひました。けれど、どんなにしてももう仕方はありませんでした。

ハアキユレスの呼吸はだん〳〵衰へて行くばかりです。

ハアキユレスは山の上に、自分の葬式のため大きな木堆みをつくりました。いつかずつと前ある親切な人馬のホラスにしてやつたと同じやうな木堆みです。出來上ると、その上に獅子の毛皮をひろげて、その上には、棍棒をのせました。

ハアキユレスはその上に横はつて、悲しげに集つてきた友だちに言ひました。

『火をつけてくれ。』

友だちは、默つて火をつけました。赤い焰がめら〳〵と燃え上り、白い煙が悲しげに空へのぼつて行きました。

ハアキユレスの最後

かうしてハアキユレスは死んでしまつたのです。

誰よりも強かつた人、どんな苦しみにも勝つたハアキユレスも、心の中にゐる命取りの惡物にはとう〳〵負かされてしまつたのです。獅子や、ヒドラや三つ頭の犬や、人食ひ馬やその他、平げた澤山のおそろしい化物には少しもしり込みせず面と向つて行つたのでしたが、自分の心をおさへつけることは出來なかつたので

した。

人間は誰でも二通りの心をもつてゐるものです。一つは、勇敢で、素直で、氣高くて、思ひやりのある善い心で、も一つは、亂暴で怒り易く、自分勝手で慾が深く、臆病で恥知らずの心です。人はみんな子供の時に、このどちらかにきまるものです。善い方にならうとして惡い方をおさへつける人は、善い心ばかりになります。さうでなしに惡い方に氣を入れて惡いことばかりしてゐると、一生をめちやめちやにしてしまひます。不幸な者をいぢめたり、可愛がつてくれる人を辱しめたりするやうになつてしまひます。

何百年かの後、聖パウロがコリントの岩山に立つて、コリント灣の青々とした水を見わたした時は、きつとこのハアキュレスの話を思ひ浮べたことでせう。

左手には、きら〳〵と雪に輝やくパルナサス山の雙の峯が、デルフオイのお告げ場の上の邊に、くつきりと空にそびえてゐたでせう、右の方にはるかに地峽が見下せたでせう。こゝはハアキュレスがはじめてタイリンズに行くとき通つたのです。ずつと後になつてはギリシャの少年や青年たちが三年毎に集つて、體操や駈け足や相撲やその他の競技のお祭をしたのです、聖パウロがコリントの人々

にあてゝあの名高い書をかいた時には、恐らくこれ等のことが胸に浮んだことでせう。そして、秀れた者となる修養には、何事もひかへ目にしなければならぬといふことに氣がついたでせう。

「すべて勝を爭ふ者は何事をも控え愼しむなり。彼らは破れ易き冠を得んがために之を行ひ、我らは破れざる冠を得んがために之を行ふなり。されば、我が走るは目標なきが如きにあらず、我が鬪ふは空を擊つが如きにあらず。已の體を打ちて之を服せしむ。蓋は他の人を敎へて自ら棄てられんことを懼るればなり。」

（をはり）

太陽をとつた話

アメリカが、まだ今日のやうに開けない、ずつと、ずつと昔のお話です。そのじぶんは、今日とちがつて、黑ん坊の土人ばかり住んでをりました。

そのころ、ある山おくの谷あひに、土人が大勢集まつて村の様に住つてゐる部落がありました。その部落は、晝も夜もまつくらで、その上、大へん寒くつて、それは〳〵、不愉快なところでありました。それでも、そこに住んでゐる人々は、もうなれてしまつて、そんなに不愉快にも思ひませんでした。

その部落に一人の若者がありました。その若者ばかりは、自分の部落が不愉快で、不愉快でたまりませんでした。どうかして、もつとあかるい、あつたかい、そして氣もちのよい所を、見つけたいものだと思つて、若者は毎日々々山の中をあちら、こちら、さがしてをりました。

ところが、ある日、ひよつくりと、山の麓に出ました。

そこにもやつぱり、土人の住つてゐる部落がありました。その部落は、あかるい、あつたかい、そして大そう氣もちのよいところでした。若者はふしぎに思つて、その部落の中へ、ずんずんは入つて行きました。

すると、見るもの、聞くもの、ことごとく、ふしぎなものばかりです。若者はあたまの中がひつくりかへるほど、おどろきました。なかでも、一ばん若者をおどろかしたものは、「火」といふものです。それは御馳走をこしらへたり、あかりをつけたりする大そう便利なものであつたからです。

しかし、もつと、もつと若者をおどろかしたものは、その火から造つた「太陽」といふものでありました。この部落が、あかるくつてそして大そう氣もちのよいのは、太陽のおかげであるといふことを聞いて、若者は、急に太陽がほしくなりました。

若者は、いそいで自分の部落へかへりました。

そして、部落の人達の頭になつてゐる酋長に會つて、自分の見てきた事、聞い

てきた事を一つ一つ話しました。中でも、太陽については、一段と力をこめて、

『酋長様、私は「太陽」といふ不思議なものを見て參りました。もし、太陽といふものがありましたら、この部落は明るくつて、あつたかくつて、それは〳〵心地よい處となります。』

と言つて、若者は酋長に太陽の説明を熱心にしました。

けれど、太陽を見たことのない酋長には、それがどんなものだか、一寸も分りませんでしたから、太陽を買つて來いとも、貰つて來いとも言ひませんでした。

しかし、若者は、太陽がほしくて、ほしくて、たまらないので、また、麓の部落へ出かけて行きました。

行つて見ると、ます〳〵ほしくなるばかりですから、また、自分の部落へかへつて來て、酋長に會ひました。そして再び、太陽の必要を、熱心に話しました。

酋長も、若者があまり熱心なので、とう〳〵若者の言葉に從つて、

『そんなに欲しいものなら、行つて買つて來るがよい。』

と、言ひました。

若者は、酋長の言葉を聞くと、大喜びで、飛ぶやうに麓の部落へ行きました。

若者は、部落の人々に會ふたんびに、

『太陽を賣つてくれませんか。』

『太陽を賣つてくれませんか。』

と、たのんで見ました。

けれど、誰一人まじめに相手になつて、賣らうと言つてくれる者がありませんでした。

若者はがつかりして、すぐ〳〵、自分の部落へかへつて來ました。

それから後も、若者はどうかして、太陽を手に入れたいと思つて、色々考へて見ました。

けれど、一つもよい方法が見つかりませんでした。

そこで、たうとう「とつて來てやらう」と決心しました。さうは決心したものの、太陽の番人は、一日中たつた二三分しか眠りません。そして、その間でも、片眼を開けてゐるので、なか〳〵すきがないのです。ですから果して巧くとつて來られるかどうか分りませんでした。

このやうに、若者はいろ〳〵と考へてゐましたが、そのうちに、よい考へがうかんだと見えて、太陽をとりに出かけました。

若者が、麓の部落へつきますと、ちやうど、部落の人々は、みんな狩獵に出て留守でした。

そこで、若者ははかに、魔術をつかつて、樫の木になりました。

そして、人々の通りさうな路ばたに、横はつてをりました。ちやうどそこへ、若者の待ちかまへてゐた、太陽の番人がやつて來ました。で、樫の木になつてゐた若者は、喜んでをりますと、番人は樫の木を見つけて、

『これはよい薪になる。』

と言ひながら、ひろつて歸りました。番人は家へ歸ると、さつそく、ひろつて歸つた樫の木を折つて火の中へくべました。

若者は、火の中で、ぼう〳〵もえながら、一生けんめいになつて、熱いのをがまんしながら、番人のすきをうかがつてをりました。

すると、番人はうと〳〵眠りかけました。若者は『こゝだ』と思つて急に火の中から、とび上りました。そして、太陽をこつそりとつて、自分の部落へ歸りました。

若者は、太陽を自分の部落の人々に見せて、喜ばしてやらうと思つて、とくいになつて歸りました。

しかし、部落の人々は、あんまり急に明るくなつたので、みんな、

『眼がいたい、眼がいたい。』

といつて逃げまはりました。

そこで、若者はおどろいて、これではいかぬと思ひ、いろ〳〵考へた末、西の

空に孔をあけて、太陽をおとしました。

しかし、おとしただけではいけないので、また、東の空に孔をあけて、太陽の出るやうにしました。

それから後、この部落は、ちやうどよい工合にあかるく、あつたかくなつたので、人々は大そう愉快にくらすやうになりました。

（をはり）

昭和二年三月十五日印刷
昭和二年三月二十日發行

（繪入世界童話）
定價金貳圓貳拾錢

著者　金塔社編輯部
發行者　東京府下西巣鴨町新田七〇〇番地　瀬戸文雄
印刷者　東京市芝區愛宕町二丁目十五番地　林傳一郎

（不許複製）

發行所　東京市外田端三百五十一番地　金塔社　電話小石川五三八七番
發賣所　東京市麹町區飯田町四ノ十八　三陽書院　振替東京六一二五五番